

## フェレイラ、そして沢野忠庵：「沈黙」論の前提として（一）

下野，孝文  
県立長崎シーボルト大学国際学部助教授

<https://doi.org/10.15017/8942>

---

出版情報：語文研究. 94, pp.29-40, 2002-12-26. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：



# フエレイラ、そして沢野忠庵

——「沈黙」論の前提として(一)——

一

『沈黙』(新潮社、一九六六・三二)、その先駆として在るのが「最後の殉教者」(『別冊文芸春秋』一九五九・二二)である。長崎浦上信徒の受けた厳しい試練、浦上四番崩れ、旅を題材として「氷のような神の沈黙」を素描した。その後、余儀なくされた長期の入院、思惟の時を経て『沈黙』へ向けての助走が始まる。「その前日」(『新潮』一九六三・一)、「札の辻」(『新潮』一九六三・一一)、「雲仙」(『世界』一九六五・一)<sup>(注)</sup>などである。描かれたのは、「最後の殉教者」と同じく迫害に抗し、翻弄される信徒達の姿であった。その展開から把握されるのは、一連の作品が、素材、人物、舞台などを歴史的な背景に求め、その上に成っているということである。

## 下野孝文

『沈黙』は、時代は一六四〇年代を軸に、人物は背教伴天連としてキリスト教史に汚点を残したクリストヴァン・フエレイラ、ロドリゴとなるジュゼッペ・キャラを中心に据えた。しかし、汚点は拭うべきもので衆目に晒すものではない。それゆえに、彼等に関わる史料は少なく、断片的なものに留まる。それでも、その断片は彼等の棄教、或はその後の日々などを僅かながら伝えてくれる。

本稿では、かかわる諸史料に抛りながら、そこに映し出されたフエレイラ、後の沢野忠庵について考えてみたい。

二

徳川幕府の鎖国政策確立へ向けての動きは、またキリシ

タン迫害の極まっていく展開でもあった。そして、その両者の糾つ歴史を伝えるのが『日本切支丹宗門史』(以下「宗門史」と略す)である。そこには、幾多の神父信徒の殉教と棄教が詳細に記され、そのなかにフェレイラの棄教、そしてその後の目明しとなった姿もあつた。

その『宗門史』に、雲仙の熱湯責めを被るカルバリオ神父へ、さらに加えられた精神的拷問(傍線下野、以下同様)についての記述がある。

それは、「そこへ家来が、神の像をもつてやつて来て、それを冒瀆せよと命じた。神父は、彼等に腫れ上つて血染れの足を示し、『そんな瀆聖をさせるより、私はこの足を切落してしまひませう。』と言へば、役人は、『お前を縛つて、聖像を足の下におつつけるぞ。』と叱つた」(下巻一六三一年)という描写であり、実際の踏絵を伝える最初期の記述である。にもかかわらず、その十年後「聖なる十字架に対してなした彼の背教」、「この棄教者は、足に踏ませて、キリシタンを発見するために十字架を偶像の寺の敷居に置いた」(下巻一六四一年)とも記す。ここから、踏絵の発案者としてフェレイラを指す視点も生じる。しかし、明らかな錯誤にもかかわらずその名が踏絵と結びつけられるのは、「恩寵と稀代の天才に恵まれた修道者」(中巻一六二〇年)だった彼の棄教

がいかに教会側にとつて衝撃的であつたかを物語っている。『宗門史』は、そのように「天才」と称せられながら「この棄教者」と厳しい言葉を浴びせられるに至る、彼の潜伏、捕縛、棄教という展開の概ねを伝えてくれる。

フェレイラの名は、一六一七年「この政治の中心では、危険極まりなく」(中巻)という非常に厳しい状況下、「上方」に潜伏しその使命を果たしている一人として初めて登場する。そして、「もと恩寵と稀代の天才に恵まれた修道者たるクリストフ・フェレイラ神父は、平戸に行つた。彼は、天使の如くに扱はれ、千三百人の告解を聴いた」(前出)とあるように、その信望と徳の高さを記す一方で、「もと」と前置きしてそれらを過去のものとする。こうして、彼の二十年に及ぶ労苦、「顕著な功績」も「もと」のこととして奪われる。

また、「これから語ろうとする話は、殆ど全部、この修道者の最後の手紙と彼が転ぶ少し前のものであり、哀れな失敗の一寸先に書いたクリストフ・フェレイラ神父の感嘆すべき書翰より引用したものである。この使徒的の感動と熱に満ちてゐるこの書翰は、彼の罪を犯すその時まで、フェレイラ神父の徳の為の証拠であつた」(下巻一六三一年)という註記も同様である。棄教は、繰り返し強調され、その信望の高さゆえの反動が「罪」として刻印される。状況は、まさに作品

の「たんなる一個人の挫折ではなく、ヨーロッパ全体の信仰と思想の屈辱的な敗北のように思われた」という一節を映している。

そして、その「語らうとする話」は、作品の始まりに挿入される、「一六三三年の三月二十二日に彼が巡察師アンドレ・バルメイロ神父にあてて長崎から発送した手紙」と重なる。

その内容は、一六三一年一月から翌年一月にかけての、フランシスコ・デ・イエズス神父を始めとする七人の神父信徒たちの雲仙における拷問の様子であった。それを伝え聞き、認め送られた報告が「感嘆すべき書翰」となる。加えて、この辺りの一連の経過は、フェレイラの捕縛時期についても考えさせる。

その経過は、まず少なくとも一六三三年初旬までは務めの果たされていたことを語る。それに翌年九月二四日長崎に「監禁されてゐた」(下巻)という記述を併せれば、その捕縛時期もおおよそ理解される。未だ仮に「上方」にいたという前提に立つならば、移送の問題も含め、前年下旬から一六三三(寛永一〇)年初旬に至るまでがその時期となる。そして、その監禁の記事からひと月も経たない一〇月一八日、フェレイラは全ての信頼を失う。

「この教会の最も花々しいものの一つであるべきこの殉教

が、イエズス会の立派な宣教師、否管区長その人の背信によつて暗くされた。拷問五時間の後、二十三年の勇敢の働き、改宗の無数の果実、聖人のやうに忍耐された無限の迫害と難儀によつて確固としてゐるさうに見えたフェレイラ神父が、(略)、哀れに沈没した」、「当時五十四歳で、イエズス会にあること三十七年であつた」(下巻)と、棄教の様子が伝えられる。しかし、続く一節では「その会員の祈りと、日本の最初の使徒聖フランシスコ・ザベリオの代願は、他の宣教師の犠牲の代償で、精神的に死んだ不幸な背教者を復活させた」と、立返りを記す。

関連して、古賀十二郎は、長崎の曹洞宗皓台寺過去帳の調査からフェレイラの没年を「慶安三年庚寅十月十一日、法名を「忠安浄功信士」と報告する。さらに、もし立返りがあつたとすれば、その遺骸は寸断、灰にされ遠い海に捨てられるという当時の習い<sup>注1)</sup>に処せられたはずである。ともかくも、過去帳の記載は、禅宗の徒として生を全うしたことを証すと考える。そして、「宗門史」における棄教時一六三三(寛永一〇)年「当時五十四歳」、日本での「二十三年の勇敢な働き」という記述に、没年の一六五〇(慶安三)年を加えれば、来日は一六一〇(慶長一五)年前後、享年七一歳前後といふ関わる数字も現われてくる。

そのように褒讃の対象から墮落の象徴へ、その甚だしい落差を身に負い、背教伴天連としてその生を長崎で全うしたフエレイラであるが、その負わされたものの重さは史料の行間にも滲んでいる。

### 三

背教伴天連となった時、彼の眼前には、目明しとして既に三十年近くを務めるトマス荒木がいた。トマス荒木は、時にフエレイラとともにあり、その姿は目明しとなったフエレイラ自身の姿でもあった。

荒木は、この大村の教会のキリシタンの多くが、恐怖のために棄教した。(略)全く悪い張本人は、ローマで紋品された日本人の神父(アラキ・トマス)で、彼は日本に帰つて棄教し、教会に対して猛烈な戦ひを開始した(上巻一六〇五年)と『宗門史』に登場する。それを証すように、彼の行動は自責と自棄、歪んだ意志の発露のように神父信徒等の志を躓かせることに向けられている。「この不幸な人が、二人の宣教師を棄教させようと約束してゐたのである」(中巻一六二一年)、「この日、難教者に棄教させるため、荒木に試みさせて見た」(同一六二二年)など、背教伴天連たる彼の果

たすべき役割は明らかであり、その務めぶりも「教会に対して猛烈な戦い」という形容と違わぬものであった。

一六三七(寛永一四)年、薩摩から長崎へ送られたオツアラツア神父は、奉行所において「背教バテレンのトマス荒木」にラテン語で取調べられた際、「貴殿は、ラテン語を話されるから、棄教者であらう。貴殿は言葉の方はお上手だが、教理の方は駄目だ」と言われ、「いたく狼狽して席を外した」(下巻)と伝える。しかし、羞恥に身の置き所をなくしたのはトマス荒木だけではなかった。

同年、続くように日本に潜入し捕縛されたゴンサレス神父の取調べには「クリストファル・フエレイラ神父と、同じく転んだ日本人の教師」があつた。ゴンサレス神父は「深い同情を感じてをります」という言葉とともに自ら認め携えてきた手紙をフエレイラに渡す。「フエレイラは、役人の訊問を受けて、手紙が自分宛てのものであることを白状しなければならなかつた。そして狼狽の色を示した」(下巻一六三七年)と、同様の恥辱を受ける。こうして、棄教後四年、一六三七年九月二一日、フエレイラは目明しとして初めて『宗門史』に登場する。そして、目明しとなった背教伴天連にとつては、「イエズス会の日本人ベトロ・カスイ神父が、物凄い拷問を受けた後、穴に吊されて死んだ。白州で、彼は、不幸

なフェレイラに引会されたのであつた。そして、彼に向つて堂々と非難した。面くらつたフェレイラは、その場を外した(下巻一六三九年) という事態も、また甘んじて受けなければならぬ仕打ちであつた。

作品において、棄教後ロドリゴは奉行所を訪れる度に、フェレイラへ「侮蔑と憎しみ」と同じ運命を共有している「連帯感」という背理する感情を持つ。それは、「醜い双生児に似ている」ことの確認の繰り返しでもあつたからである。そして、状況は、先の史的なフェレイラとトマス荒木との関係にも繋がる。

一方、ロドリゴと成るキャラとの実際の関係は、さほどに密なものではなかつた。一六四三(寛永二〇)年の捕縛、その後の長崎での取調べ、江戸への護送に関係し、またしばらく滞在した形跡<sup>(注6)</sup>はあるものの、それ以降の接点は手にした史料等からは窺えない。その点からも、「醜い双生児」の背景には、むしろトマス荒木の影を見出す。そして、そのフェレイラの目明しとしての姿は、同時代の目、<sup>(注7)</sup>長崎オランダ商館の日記(以下「商館日記」と略す)にも記されている。

その前史『平戸オランダ商館の日記』には、ポルトガルへの牽制、幕府側との慎重を期した条件整備など、貿易を軌道に乗せるための交渉に必死な日々が綴られ、それ以外の巷の

風聞や通詞との情報交換などは殆ど見ることができない。しかし、それでも耳目に届く弾圧の生々しい状況には、時に抑えきれぬ感情を潜めた記述となつて表出する。

たとえば、「今日当地で男二十人、女八人、子供六人の三十四人に死刑が執行された。その五人のキリシタンは、足の上に、頭を下にして、生きたままつるされた。そのつるされたキリシタンの最も親しい友人の五人は、彼等自身キリシタンではないが、火あぶりにされた。残り<sup>(注8)</sup>は彼等の五人組の中の一軒にキリシタンが見つかつたもので、彼等はキリシタンではなく、罪もなく、ただ彼等の近くにキリシタンが見つかつただけなのである」(一六三四・十・一五 一七)などは、不条理な弾圧に対する外側からの目を表す。決して日本側の心証を害してはならない立場にありながら、言葉は、抑制されつつも憤りを背後にした抗議の思いを滲ませている。

『商館日記』には、平戸時代以上に生活のあらゆる側面が制約され、とりわけキリスト教に関わる微かな要素も許容しないという徹底した幕府側の強固な姿勢に対する困惑と忍耐が綴られている。その身近な義務として、連絡、交渉に留まらないう出入りの受け入れもあつたのだろう。

フェレイラの目明しとしての務めは、「奉行平右衛門殿は

通詞八左衛門を招いて、検使が最近入港の支那船で発見したオランダの二ストイフェル貨を一箇見せ」色々尋ねたので、その答えを「商館の書記に日本文字で書かせて、届けさせた。奉行は背教者忠庵（元耶穌会宣教師）に尋ねたところ、我らの言と一致したので、既に入牢させてあつた支那人を釈放した」（第一輯一六四一・六・二九）という次第である。<sup>注9</sup>トマ又荒木同様、幕府の探索方としてキリシタン発見の手先となり、不審なものを嗅ぎまわることをその職分とされた。しかし、それは彼等だけではなかつた。「転宗支那人が最近江戸から着いたが、当地に来る支那人を検査し、キリシタンを見別けるため、ここに留置かれるであらう」（第二輯一六四五・六・一一）とあるように、棄教した伴天連の末路は一樣である。信仰を挫き棄てさせる、それが彼らの務めであつた。複雑な商館員の立場は、譲歩を重ねる形で日本側との關係を成り立せていた。しかし、キリシタンへの不条理な圧迫は、新教徒たる商館員達へも否が応でも伝わってくる。抑圧した感情は内に広がり、鬱屈は字面の背後に留まる。フェレイラへの視線も、また同様であつた。

「予は日本に来た時から背教パーデレたちの事を知らうと努めたが、トーマという日本人は長くローマに滞在し、法王の侍従を勤めたこともあり、前に数回キリシタンであること

を自訴したが、奉行は、彼が老年のために精神錯乱したのであると考へて放置し、その後一昼夜足で吊された後、教をすてたが、心中には信仰を失わず死亡した。今は二人のみ生存しているが、一人は忠庵というポルトガル人で元当地の耶穌会の長であつたが、その心は黒い。他の一人は前の乙名後藤庄三郎殿（略）の兄弟で、<sup>注10</sup>少しもオランダ人の不利を計ることとはない」（第二輯一六四六・一一・一七）、或は「背教者忠庵がオランダ人やポルトガル人について色々な事を書面に認めて、近い中に宮廷に発送しようとしていると聞いた由。会社が迷惑を受けることの無いためには、この神を忘れた悪漢の死を望むほどであるが」云々（同二九）など、厳しい言葉が向けられている。

その殆どに、哀れみや侮蔑のこもつた「棄教」、「背教」のパードレという前置きを付けられる「ジュアン」ことフェレイラは、その役目からも商館にとつて歓迎されるべき人間でなかつたことは容易に察せられる。しかし、その好意的に記されるはずもないという状況は、商館員の利害によつてのみ生じた感情だつたのかどうか。そこには、警戒を含めた不快なものに留まらない、彼個人への感情も働いていたのではないか。そして、そのオランダ商館員たちから疎まれていたであろうフェレイラも、反語的な響きの感受される「これまで

四十年の間、当所に留置かれ、我らがジュアンと称えた背教者である耶穌会のパーデレが、昨日この世を去つたことを聞いた」(第三輯一六五〇・一一・六)という一節を最後に、その名を見出すこともなくなる。

嘗ての威厳と信頼に満ちた指導者としてのフェレイラは、『商館日記』のどこからも窺うことはできない。屈辱と自棄に支配された、目明しとしての日々を想起させるばかりである。それは、背教件天連として被つた様々な圧服が、その精神を苛んだ結果でもあろう。その大きな要素の一つに、排耶書の執筆を挙げたい。作品では、ロドリゴとの再会の場面で、既に沢野忠庵となつた彼が、いかに「我々和人に」役立っているかの一例として「デウスの教えと切支丹の誤りと不正をば暴露く書物でな。たしか頭偽録とか言つたが」と通詞により語られる所である。その奥書は、次のように記される。

右之一冊者 鬼立志端宗門 拳所秘之大綱 而頭真偽論是非矣 故名曰頭偽録矣 細欲記之 不解文字 審欲言之 依五音別而專義乎 雖然濫輿都有此卷中 衆人錯

無疑着之矣 于時寛永十三天龍集丙子九月吉旦

フルツガル国ノ住人 日本天河司罰天連キリシトワン

ヘレイラ改宗旨作禅宗 忠菴誌焉<sup>(註)</sup>

キリスト教の大綱、重要な所を挙げ、その真偽を記したゆ

え頭偽録と名付けた旨を伝えるが、その偽を顕わすとした所からも既に企ては明らかである。そして、日本語の表現や語彙など未だ不十分なゆえ、詳細に伝えることは思うに任せないと思つながら、「濫輿都有此卷中」と、宗門の奥深いところでは全て表したという内容の信実と、「衆人錯無疑着之矣」と、衆人の誤つて入信するような迷いなどないようこれを書いたという目的とを強調する。

この執筆が、強いられた結果ということとは言つてもない。それが、忠庵の口述に付き添つた儒者などの取捨、加筆に拠り成つたこともまた言つまでもあるまい。或は、さらなる検閲訂正も考えるべきであらう。しかし、形はどうあれ排耶書に携わつたことの、棄教の事実をさらに己に刻印する所行となつたことは否めまい。稿されたのは、棄教後三年、一六三六(寛永一三)年。既に日本名を名乗らされていた。

そして、目明しとしての彼の務めぶりを象徴するのが次の史料である。

寛永五六年二至リテ邪宗門ノ者悉ク転バセ正法ニ入レ踏絵ヲフマセラル然ルニ其比南蛮伴天連仲庵同了伯日本伴天連了順此三人トモニ帰正セシ者ニテ白状シケルハ切支丹ノ法ハ魔術ニテ人ヲ迷ハシ終ニ国ヲ奪フノ謀ノ由云フ故ニ命ヲ助ケ置カル依是三人訴ヘテ日転ビノ者ドモ再ビ



邪宗ニ立帰ラザル誓文ヲ致サセ且三人証拠ノ奥書ヲ致シ  
候ハゞ重テ邪宗ニ八帰ルベカラズト云ニヨリ則邪宗ノ目  
明ト名付其奥書如左

転書物之奥書

右之趣証文を以吉利支丹転び御影を踏杯と云事切支丹宗  
門之上ニためしなき事にて御座候此上八以来切支丹宗門

ニ\*(注、以下脱文か)

南蛮ころび伴天連 仲庵

日本ころび伴天連 了順

南蛮ころび伴天連 了伯(注)

「仲庵」は沢野忠庵、「了順」は後藤了順、「了伯」は荒木  
トマスである。三人は、先の『商館日記』(一六四六・一一・  
一七)にも登場する。状況は、探索などが三人の連携に拠つ  
ていたことを示す。注意したいのは、「転書物」の件である。  
三人は「命ヲ助ケ置カル依是」と、その助命の代償として  
「転ビノ者トモ再ビ邪宗ニ立帰ラザル誓文」について提案し  
た。「誓文」は、転んだキリシタンが立返ることなどはし  
ないと誓約した起請文である。それは、神仏への日本誓詞  
とデウス、マリアなどに対する南蛮誓詞とから成った。三  
人が関係したのは後者であり、背いた場合はデウスらによる  
罰を想定する。棄教者が南蛮誓詞によって、立返ること

もできぬほどの思いに至る、それを証す者として奥書にその  
名を連ねたのである。片岡弥吉は、その効果を「絵踏とい  
う瀆聖の罪の重さを強調し、希望の対象であるデウス、サンタ・  
マリアの名をもって再び立ち返らないと誓わせることによつ  
て、信仰回復の希望の芽をつみとろうとした」と説く。(注)

見てきたように、その職分と関わる史料からは、先の『商  
館日記』の「その心は黒い」、或は「神を忘れた悪漢」とい  
う把握に牽かれるのが、作品の造形へも通底する驕りが強く  
感受される。そして、その驕りとも繋がるだろうが、史料に  
は家族に触れたものもある。

沢野忠庵八本南蛮人にて日本へ帰化仕候而日本形二成申  
候。(略)京都ニ在住申候を板倉様御所司の時分御吟味  
之役ニ付公儀より三十人扶持被下候而長崎五嶋町ニ被召  
置候而宗門の目付ニ被仰付候。此相役ニ後藤了順と申者  
御座候。是も同前ニ御扶持被下長崎中の宗門を吟味仕候。  
只今御屋敷ニ相納申候町々の宗旨踏絵帳面八先年八右両  
人方へ相納申候。(略)忠庵八本八夷人ニ候へとも此方  
の太平記等八読ほととの和才ニ相成申候由。其子を忠次郎  
と申候而ヒロウトノ功者ニ而御座候。婿を杉本忠意  
\*(注、忠恵の誤り)と申候而外科にて御座候。忠意  
(同前)事江戸へ被召出候由承及申候。(注)

京都から長崎へ「御吟味之役」として配された忠庵は、居を長崎五島町に構え、荒木トマスが没した後は後藤了順と二人で踏絵などを管理しその役目を果たした。また、「忠次郎」という息子と杉本忠恵に嫁した娘、二人の子供のいたことも伝える。妻についての記述はないが、シャルウオア(注1)「日本史」の一六五〇（慶安三）年の記事に拠る「破廉恥で富有な唐人の寡婦たる日本婦人を娶つたが永く同棲もせず又軽浮で一定の地位に留まらず、人から擯斥されて交る者もない」という把握を見れば、おおよそは測られよう。作品では「死刑にされた男の妻と子供も一緒にもらった」とあるが、実際は上述の通りであった。

しかし、棄教後の生が、鬻りをのみ帯びていたわけではない。「太平記等八読ほと和才二相成申候由」という一節へ目を向ければ、フェレイラの異なる生も見えてくる。

#### 四

沢ノ忠庵と云ハ、ホルトカルノハテレンナリ。今村伝四郎殿・曾我又左衛門殿ノ時ニコロヒ申候而、ゼン宗ニナル。御忠節申上候故、公儀より御扶持切米ヲモ被下候。(注1)  
於長崎慶安三年二死ス。ナンハンノ学者也。

注意したいのは、「ナンハンノ学者」として結ばれている点である。その把握は、作品でも表されている。

私は役に立っている。この国の人々に役に立っている。

(略) もちろんこの国には中国から学んだ優れた医学があるが……しかしそれに私等の外科をつけ加えるのは決して無駄ではないだろう。天文学だって同じことだ。

そして、その語られる天文学、医学への貢献の意志は、史料からも具体的に見て取ることができる。

長崎に仮名天文鈔と申書二冊諸人皆写し置申候書物御座候。又八三国運氣通要鈔とも題し申候。(略) 此書八先年浅野長済様と申医師江戸より御下り被成候て南蛮の目付沢野忠庵に被仰付候而西洋の天文の学の趣を被為書候。

其節忠庵八元より日本文字は読申候得共和字を綴義八成申さず候二付光源寺住持松吟と申僧侶筆訳仕候。就夫此書を世に光源寺天文書とも申候。(中略) 且又此二冊の書の内を段々拳申候而并破致候書物を乾坤弁説と申候而四冊御座候。(注1)

語られるのは、長崎には「仮名天文鈔」、或は「三国運氣通要鈔」とも言われる二分冊の天文書が伝わっており、これは、江戸から長崎に來た医師浅野長済の求めに応じて、目付であった沢野忠庵が編述したものであること。また、彼は、

日本文字を読むことはできたが綴ることができなかったため、光源寺の住職松吟が筆訳し、それを世に光源寺天文書と称した。それから、その忠庵の編述した天文書を弁駁した『乾坤弁説』と題する四冊本の成った旨である。一方、その『乾坤弁説』の序文を見ると、別の伝播、把握もある。

寛永廿年癸未、筑之前州大島之海上、卒然怪船漂蕩、(略)其人十有余人、皆蛮僧破天礼鬼利支端之徒也、筑前之太守源忠之公、令士擒捉、寄之長崎奉行所、以達江武井上筑後守基宗公、基宗公下之於獄、不数歳皆自悔非謝罪、改鬼利支端而為我民俗、破天礼長老有精天文者、乃以天文書進上井上筑後守基宗公、二三年之後、基宗公令忠庵訳之、訳功漸成、進上其書、即此篇也、蓋南蛮学家天文地理之説、悉載此書、其草稿猶在忠庵家、終篇訳以和語、書以蛮学、吾人雖博学之士、不能読之、唯通辞西吉兵衛能読蛮学、長崎奉行所、置此書於西吉兵衛家、不敢許人之見、其命敵矣、明暦丙申之冬、長崎奉行甲斐庄喜右衛門尉橋正述公、命僕及西氏倭書之、吉兵衛乃訳字、僕以倭字写之、重命僕者弁此書

一六四三(寛永二〇)年、筑前大島に十人に及ぶバテレン等、キヤラ一行が漂着した。そのなかの長老(マルケス神父か)が天文学に長け、改宗後井上筑後守に天文書を進上した。

それから二、三年して、筑後守は忠庵にその翻訳を命じる。しかし、それが羅馬字綴りだったために西氏に保管させ他見を許さなかったと言う。こうして「明暦丙申之冬」(一六五六年)、時の長崎奉行の命により西吉兵衛がローマ字を読み、向井元升が和字に写したとなる。そして、その「本論忠菴編述」に命ぜられて弁駁した元升の「弁説玄松考議」が加わり、『乾坤弁説』は構成された。

また、序文の終わりにには、「時明暦己亥九月望日、肥陽長崎向井玄松序」とある。しかし、明暦に己亥はなく、脱稿は明暦三丁酉(一六五七)年から万治二己亥(一六五九)年となるうか。さらに、忠庵の自序もあり、それには「于時慶安三年月日忠菴序」とある。月日は明記されていないが、没年慶安三(一六五〇)年に本論の仕上がったことが分かる。

そして、「忠庵八外科の弟子八御座候へトモ天文の弟子八無御座候」とも語られるように、医師としての忠庵はさらに看過できない。

「忠安の転宗は、南蛮医学の復活に大きく関わっていた」、「南蛮医学からオランダ医学へ移行する基礎を作っていたのである」という指摘があるように、その棄教は、鎖国で閉ざされていた南蛮(ポルトガル)の医学知識が彼を通して再び活かされ、平戸、とりわけ長崎出島の商館を通して紅毛(オ

ランダ）医学がもたらされるまでの貢献を意味した。その実際は、『商館日記』のなかにも窺つことができる。たとえば「背教宣教師ジョアン（忠庵）が奉行所の上士二人と来館、外科医にいろいろの薬草の効能と諸病の治薬とを尋ね」云々（第二輯一六四八・七・一二）という次第である。そのような、医学的な見聞を広げるための来館は他にも散見される。<sup>（注10）</sup>

加えて、その弟子となった者も少なくない。主な弟子に、半田順庵、杉本忠恵、西吉兵衛（玄甫）などがいた。女婿杉本忠恵、通詞でもあった西吉兵衛はともに幕府に仕え、半田順庵の弟子吉田自休門下の吉田自庵、村山自伯も江戸に招かれ、幕医となった。<sup>（注11）</sup> こうしてフェレイラは、後代につながる医師としての足跡も残した。

史料には、沢野忠庵となり自明しとして、その忌むべき役割を果たす姿が記されていた。そして、その表現の背景には彼の歪んだ屈託も窺えるようであった。しかし、その一方で、当時においては貴重な自身の医学知識を活かす一方で、さらなる後進の指導、また晩年に至つての天文書の編述など、何かしら人々へ寄与できればという意識も充分に感受される。そのような棄教後の生であったと言える。

一六三三（寛永一〇）年の棄教から亡くなる一六五〇（慶安三）年まで、一七年ほどの生を、遠藤は手にした史料を

換骨奪胎し虚構のフェレイラ、沢野忠庵を創った。本稿で検討した史料、その幾つかは傍らに留まることもなかったかも知れない。しかし、歴史に僅かながら刻まれたフェレイラ、沢野忠庵の在った姿を臆気ながらも形作る作業は、『沈黙』を論じる、その起点ともなると考える。

本稿では、ロドリゴへと創られる、ジュゼツペ・キアラ神父に関しては敢えて触れなかった。稿を改めて検討したい。

#### 注

注1 全て『哀歌』（講談社、一九六五・一〇）所収。遠藤は『哀歌』を私の『沈黙』の前奏曲、と考えて下さつてよい」（『哀歌』の思い出、『哀歌』講談社文芸文庫所収、一九八八・七）と、回顧している。

注2 レオン・パジェス著／クリセル神父校閲／吉田小五郎訳（上巻一九三八・三、中巻同・一一、下巻一九四〇・八、岩波文庫）。

注3 「背教者沢野忠庵」（『史学』第一九卷第三号、一九四〇・一二）。

注4 『宗門史』にも散見されるが、「聖なる遺骸の傍に、夥しい人々が集つて来たが、之は遺骸に敬意を表し、又は着物の端切れや血の染んだ土を手に入れるためであった。或る人々は、未だ淋漓と滴走つてゐる血をとり、この尊い血で額に十字架のしるしをかいた。又ある者は手に血を浸した」（上巻一六一二年）などは象徴的である。ゆえに、「吊された人たちは下して

寸断し、焼いて粉にした上、海に投げた」（『商館日記』第二輯一六四七・四・三）とならざるを得なかったわけである。

注5 詳細は不明。片岡弥吉『日本キリシタン殉教史』（時事通信社一九七九・一二）の表「キリシタン時代の邦人司祭に拠れば、生年、出身地不明。教区司祭。ローマで一六一三年以前に叙階。一六四六年頃長崎にて没。備考に背教・改心とある。

注6 和田万吉訳『モンタヌス日本誌』（丙午出版、一九二五・三）に、キャラ一行と同時期の「ブレスケンス号」事件の取調べに「背教僧シオワン」の名で度々登場する。

注7 村上直次郎訳（第一輯一九五六・一、第二輯一九五七・一、第三輯一九五八・八、岩波書店）。

注8 永積洋子訳第三輯（一九六九・一二、岩波書店）。

注9 他にも一六四五・三・二九、一六四八・一一・一五、一六五〇・九・三〇など、調査、探索のための来館が記されている。長崎の町年寄であり、最高指導者の一人「後藤宋印の第二子」。

注10 「了順は日本のセミナリヨなどで教育をつけた後、マニラで修学、日本司教区司祭となり、一六一八年（元和四年）帰国」、背教後は沢野忠庵の相役として目明しを務めた。片岡弥吉『踏絵 禁教の歴史』（日本放送出版協会、一九六九・六）。

注11 与謝野寛他編『日本古典全集』「ぎや・ど・べかどる」下巻（日本古典全集刊行会、一九二七・六）所収。新村出写『顕偽録』（県立長崎図書館蔵）参照。尚、二〇〇二年度「遠藤周作文学館」（長崎県外海町）『沈黙』展において、書写された『顕偽録』の展示のあったことを付しておく。

注12 熊野正紹『長崎港草』全一五巻、「第一巻碎邪建梵刹」（西道仙・安中半三郎校訂一八九四・五、森永種夫・丹羽漢吉校訂復刻、長崎文献社、一九七三・五）。

注13 注10に同じ。

注14 『測量秘辞 享保一七年』（県立長崎図書館蔵）。「享保年間に江戸の人で渡辺軍蔵と云ふ者が長崎に赴き、有名な向井元成と盧艸拙とに就いて学術上の質問をして両家がそれに答へた書簡を筆録したものを、三輪執斎から借りて細井広沢が写した」（新村出「徳川初期に於ける仏徒の耶教排撃」、『歴史と地理』一九一八・一）という解説もある。

注15 *Pierr François Xavier de Charvoix : Histoire et Description generale du Japon. 1785*

注16 新村出「乾坤弁説の原述者沢野忠庵」（『史学雑誌』一九一三・九）。

注17 中西啓編『長崎割記・元成日記・元仲日記』（長崎学会叢書第九輯、一九六四・三）。

注18 注14に同じ。

注19 『文明源流叢書第二』（図書刊行会、一九一四・一）所収。

注20 注14に同じ。

注21 中西啓『長崎のオランダ医たち』（岩波新書、一九七五・一〇）。

注22 その他、（一六四八・七・二六、九・二五、一〇・二六、二七）などにも記事がある。

注23 古賀十二郎『長崎洋学史』下巻（一九六七・四、長崎文献社）参照。

尚、他の史料との関係は、拙稿「沈黙」論 諸書との関係から」（『近代文学論集』第二八号、二〇〇二・一一）を参照して頂きたい。

（しもの たかふみ・県立長崎シーボルト大学国際学部助教）